

謹賀新年

目指すものには努力を惜しまず、

今年も夢輝く1年に！

2007年1月

東雲中学校陸上部顧問一同

年の初めの「夢」にまつわるよもやま話

- 昨年の暮れに、松坂大輔がメジャーリーグのボストンレッドソックスと契約した。何でも入札額と契約金、複数年の年俸をあわせて一度に120億円以上のお金が動いたのだから、あいた口がふさがらない。彼は記者会見の時に「僕は夢という言葉は好きではない。夢はかなわないものというイメージがある。何でも絶対に実現してやると思っているので、今回のレッドソックス入りもひとつの目標を達成したことに過ぎないと思っている。」といった内容のことを口にしてしている。メジャー入りはひとつの通過点であって、現状に満足しているのではない。まだまだこれからだという思いから、彼の強い信念がうかがい知れる。松坂は甲子園の優勝投手で、西武ライオンズでも大活躍、昨年春のWBCではキューバを破り世界一になるなど、野球のエリート中の超エリートである。彼の言動には異論はない。

しかし、しかしである。誰もが松坂のような恵まれた才能を持っているとは限らない。一般的には、自分の才能のなさに失望し、挫折を感じたことがある人の方が圧倒的に多いはずだ。先生自身を振り返ってみても、自分は故障の多い三流ランナーであったし、大学を出て教師になっても、荒れた子どもたちを目の前にして大きな挫折感を味わったこともある。淋しい言い方だけど、自分の理想を下方修正しながら、それでも何とか頑張っていることが人生なのかもしれないなんて思えたりしたこともあった。

「夢は見るものではなく、かなえるものなんだ。」と強く言い切ることができるようになったのは、陸上の指導をはじめて3年くらいたった時だった。何にも陸上の指導がわからない先生に、「先生、ぼくたちは強くなりたいんです。」とキラキラと輝く瞳で訴えかけてきた当時の選手たち。(実は、最初の7年間はバスケットボールの顧問をしていたのだ。)訳のわからないまま、「何でも吸収してや

ろう」と、とにかく陸上の指導で有名な先生の話聞きまくった。ドン欲でがむしゃらで、好奇心旺盛な日々であった。顧問をして3年目の大阪中学校選手権で、1年男子100mと3年女子100mではじめて自分の育てた選手が近畿大会の出場を決めた時の喜びを昨日のように覚えている。また、この年の秋にはジュニアオリンピック出場を決めた。当時は東京の国立競技場で開催されていて、この時の感動が今の自分の原点であると思っている。「いつかは、リレーや駅伝で全国に出たい」「大阪で総合優勝したい」「日本一の選手を育てたい」・・・etc。当時は夢でしかなかったことが、たくさんの失敗を繰り返しながら、それでもひとつずつ夢が実現していった。ひとつの夢を実現したその先にはでっかい感動があり、その感動が今度は起爆剤となり、次なる夢にチャレンジするエネルギーになるという、らせん階段状のスパイラルに見事にはまってしまったのだ。

高校は、中学時代の有名選手をスカウトしながら強化する一面がある。でも中学は、地域の子どもが対象である。陸上の素質のある者が優先的に入学してくるわけではない。まったく陸上を知らない真っ白な選手の可能性を伸ばしながら、共に夢をえがき、夢に向かって歩みながら、夢を実現する喜びがある中学生の指導に生き甲斐を感じています。明確な目標を持ち、正しい練習を集中して、毎日継続してやれば誰でも強くなるのだという意識が持てるようになった。身体的素質よりも精神的な部分によるものが多く、「努力の天才」を目指すことが大切なのだ。ふと気がつけば、10数年以上も連続して全国大会で戦う選手がいる。これは、出会いを大切に夢を目指した結果に過ぎないと思っている。

付けくわえておくが、松坂はたぐいまれな才能を持った天才的なアスリートである。でも、それ以上に目標実現に向けての強い信念があったからこそ、今の松坂があるのだ。160km近い剛速球が投げることができなくても、その意識の高さを見習うことは、中学生にもできるはずだ。

- 「先生、『夢無限大』の意味をもう一度教えてください。」高校でも、本格的に陸上を志す教え子から届いた年賀状に添えられていた一文である。思うような結果が出ずに苦悩しているようすが想像できた。ひょっとしたら、夢の輪郭(りんかく)がおぼろげになっていたのかも知れない。「夢には値段がないし、そのかたちも100人いれば100とおりにあるものです。目先の価値観ばかりが気になっていたり、他の人の夢のかたちを真似てばかりいたら、それは夢ではなくなるのだ。自分の信じた道を信念を持って突き進むことが夢実現のためのただひとつの道だと思っています。」と返事を書いた。たとえば、高橋尚子は国民栄誉賞を受賞したり、高額な出演料のCMに出たりするために、オリンピックで金メダルをとったのでしょうか。それは違うと思います。金もうけや、自分の栄誉のために走ったのではなく、走ることが大好きで、誰よりも速く走りたい

かった。そのことが、原点だったと思います。だから、中学、高校、大学で無名であっても陸上を続け、どんな苦しい練習にも耐えることができたのではないのでしょうか。決して夢のかたちを目先の損得勘定で変えてはなりません。自分の夢に真っ向から、正直であるべきではないのでしょうか。

- 「先生、すぐに返事をしてください。僕は洛南高校に行って、都大路を目指します。」と、彼は目を輝かせながら先生に言った。今から3年前のことである。前日に駅伝の名門校である洛南高校の中島先生が、選手の勧誘に来校して下さった次の日のことである。思い起こせば、彼はとりたてて素質のあるランナーではなかった。でも、小さい体でも負けん気は人一倍強く、練習の始めの30分ジョッグでも、ラストは先頭をとるためにガンガン走る精神的な強さを持っていた。2年生の時にはすでに、3000mを9分台で走っていたが、当時のチームは選手層が厚く、駅伝のレギュラーになることはなかった。3年になって、その記録を9分10秒にまで伸ばし、初デビューとなった11月の大阪中学校駅伝では区間賞をとり、チームも見事に初優勝をとげたのだ。12月の全国中学校駅伝でも3区で快走した選手であったのだ。

12月24日。師走の京都の風物詩となった全国高校駅伝の応援に西京極陸上競技場に行った。「夢はあきらめなければ続く。どこまでも……。」と、昨年の年賀状に書いてくれた彼ではあるが、ラストチャンスの今年もついに都大路を走ることはなかった。朝一番に、第3コーナーの競技場出口付近で偶然彼にばったり出会った。声をかけると、彼は頭を下げたあとに「今日は1区につきそいをやらせてもらっています。」と、目を輝かせながら答えた。その堂々とした受け答えに、こちらが恥ずかしくなったのだ。実は3年間都大路を走ることができなかった彼の心中を思い、なんて言葉をかけたらいいいのかと迷いがあったからだ。何のうしろめたさも、力みもてらいもなく、いつも自分の夢に真正面から立ち向かう彼の生き様に、こちらが教えられる思いになった。

春になると、彼は九州に飛び立つ。陸上競技を続け、将来は体育教師になって陸上を教えたいと言う。彼の夢は果てしなく、一点の曇りもなく、きらきらと輝いている。